
女王さまと召使

しゃヴえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王さまと召使

【Nコード】

N3172P

【作者名】

しゃヴえ

【あらすじ】

女王様のルカと召使のエイジくん。

そんな二人の学園生活。

乱暴な女王様と召使の物語。

(前書き)

昔書いたお話です。

ちよつと…… というより内容が、会話が陳腐です。

2059年。

未来がどんなものになるのか楽しみだった人々は五十年経っても変わらない世界に夢を諦めかけていた。

でも、一般人が知ることでもない裏の世界では新たな人類の形というものはすでに出来上がっていた。

場所は三上坂町の郊外にある研究所。名を『永遠研究所』と言う。そこで数年前、一人の少女が人体改造の結果、機械の身体を得たのだった。

その少女の名は……。

現在時刻午前六時ジャスト。

永遠研究所に住む私はベットから目覚めた。良い目覚めだ。三年間近く連続六時ジャストに起きている。清々しい。

隣を見ると召使いのエイジが寝ているのが確認できた。

「……まったく、こいつは朝がホント弱いな？召使いなら私より早く起きろっつうの……」

私と召使いのエイジの部屋はゴシック調の高級な調度品によってゴージャスな室内となっている。私は女王様だからこれ位しないと気が済まん。

そんな女王様である私と召使いのエイジは一緒に部屋で暮らしている。

何故召使いが女王様と一緒にのベットで寝ているかって？

私の生活にはこいつが必要なのだ。愛らしい私の召使いがな。まあ一般人にはわからないだろうけど。

エイジを起こさないように私は静かにベットから床に立ち上がった。まったく何故女王様の私が召使いに気を遣わなければならないのだ。シャクにさわるなあ……。

まあいい。シャワーを浴びなければ。それがルカ様の毎日のルーだからな。

「今日は十六日。十六番だな・・・」

私は浴室の棚にある31本のシャンプーパーボトルからマジックで16と書かれたシャンプーを手に取りプッシュ。そして髪に塗り、泡立てていった。何故31本もシャンプーパーボトルがあるかって？それは毎日違う香りを楽しみたいからだよ。お馬鹿さん。

嗚呼、もっと洗いたいところだがあまりに洗いすぎだと色々髪とか地肌にも悪影響が出るし、そこまではしない。何事もやり過ぎは良くない。

さて、シャワーで髪も体も洗ったことだし、エイジを起こすとするか。

「おいお前、いい加減起きろ」

エイジの体を激しく揺さぶる。こうでもしないとエイジは起きない。まったく、手のかかる召使いだこと。お、エイジが目覚ましたぞ。

「……あ、ルカさんおはようございます」

「おはよう。お前、さつさと体を洗いに行け。汗臭い奴は嫌いだからな。今日は十六日だから十六番を使え」

「わかってますよ……」

エイジはむにやむにや言いながら浴室に歩いていった。

さて、エイジが体を洗っている間に制服に着替えるか。よいしょつと。

私立四聖学園高等学校の女子制服に着替え終わった私は鏡の前に立ち、状態を確認した。状態ってなにかって？ルカ様の美貌の状態だよ。自慢のロングヘアをくしでとく。嗚呼うつとり……。

ついでにエイジの着る男子制服を取り出してやった。高飛車で傲慢な女王様にしては上出来だ。まあ気紛れって奴？

エイジが浴室に入ってから十数分して下着一枚で出てくる。こいつはまったくだらしがない。

「あ、ルカさん僕の制服出してくれたんですか？ありがとうございます！
ます」

「礼などよい。気紛れでやったことだ」

「またまた、昨日だつて出してくれたじゃないですか」

む、女王様にずいぶん馴れ馴れしい言葉だ。こいつ！私は本気の
百分の一ぐらいの力でエイジの頬をつねる。

「ちょ、ちよつと！なに怒ってるんですか！ほつぺたつねんないで
くださいよ！」

「そんなことはいいから早く着替える。朝食の時間に遅れるぞ」

「イタタ……、わかりましたよお……」

召使いは私の指示通り制服に着替えた。学校指定のバックもエイ
ジに持たせた！よし！食卓に向かおう！

部屋のドアを開けて、長い廊下を私が先に歩く。召使いのエイジ
は部屋の鍵を閉めて、私の約二メートル五十センチ後ろをついてく
る。

そして食卓に着く。そこには私の母、ナナエがすでに着席してい
た。

「母さんおはよう」

「おはようルカちゃん。それとエイジくんもね」

「ナナエさま、おはようございます」

エイジは礼儀正しく挨拶をした。何故ナナエの前だとも変わ
るのだろうか？まさかナナエに恋でもしてるんじゃないだろうな
あ？

確かに母のナナエは若く見える。見た目三十代前半ぐらいだ。だ
がしかし、ナナエは今年で63歳。おばあさんなのだ。ナナエの体
も機械の体、強化セラミックの骨に人口筋肉でできている。え？何
？『ナナエの体も』ってまさかつて？その通り。私も機械の体を持
つサイボーグですよ。だ。

学校に到着。バックは召使いのエイジに持たせてあるので私は楽
チンだ。学校まで歩いて30分もかかるのがネックだが、それも召

使いとの会話で忘れてしまう。

私たちは屋上に向かった。何で屋上に向かうかって？タバコが吸いたいんだよ。え？まるで不良じゃないかって？その通り！私は不良だよ！驚いたか！

「鍵を開けなさい」

私はエイジに屋上の扉の鍵を開けるよう命令した。屋上の鍵はいつも閉まっている。だからエイジに合鍵を作らせた。召使いのエイジは嫌な顔せず作ってくれたよ。エイジは独学で色々なものを勉強するのが好きらしく、合鍵を作れるかと訊いたところ「作れるよ」と言ったのだ。ある意味こいつも不良だ。

私たちは屋上の鍵を開けて出た。フェンスの外側を見る。うっん……！風が気持ちいい！秋なので空も高く見える！完璧な世界！！

「あの、ルカさん」

「あ？」

「今日も授業でないんですか？」

「出なくてもテスト問題など解けるからな」

「解けるんじゃないかってテストの時、無線で答えを聴いてるからですよ」

そうなのだ。私はテストで百点以外出したことがない。それは耳に超小型無線機が入っているからなのだ。召使いのエイジとは違うのだ！スペックが！キャパシティが！

「ルカさんずるいですよ。僕はルカさんとの付き合いで授業に出れないから家で必死に勉強してるのに……」

「黙りなさい！自分の力を使って何が悪い！そう言っているお前は私と同じで学年一位の成績じゃないか！」

「まあ、そうですねルカさんは自分の持つ能力の使い方が不純ですよ」

「女王様にたてつく気か！？」

まったく。召使いのくせに生意気だ。私はエイジからバックを受け取り、中からタバコを取り出した。銘柄はセブンスター。メンソ

ールでもカスタムライトでもない、純粹なセブンスターだ。これ以外のタバコも吸ったことがあるがどうも体に合わない。何故だろう？

ソフトパツクの箱から一本取り出し、口に加えてライターで火をつけた。私は大きく吸い込む。そしてぷかあつと煙を吐く。至福のひと時だ。これは止められない。エイジは法律で未成年者は喫煙禁止ですよ？とよく言う。

「今日も秋晴れだなあ……」

なんとなく呟いてしまう私。

「秋といえば読書ですよ」

なんだこいつ。いきなり何を言っているのだ？なんだその斜め四十五度の哀愁はなんなのだ！読書ねえ……。趣味のひとつだからなんとなく食いつきたくなる話題だ。

「ルカさんは今なに読んでます？」

エイジくん斜め四十五度が私に再び質問してきた。

「太宰」

私の好きな作家の中で結構上位にランクインしているのが太宰治。そのほかには色々というがやはり太宰だ。何度読んでも発見がある。

「太宰治の何を？」

「人間失格だよ。お前がそういう話題をふったってことはお前も本を読んでいるのか？」

私がそう訊くとエイジはいやな笑みを浮かべた。こういう顔する時は決まって何かアンダーグラウンドなことについて語る時だ。話は面白いが使い方を間違えると警察にご厄介になっちまう。こいつ一人であのまま暮らしていたら絶対に捕まっていたな。逮捕だよ。「あのですね、とうとうパスポートの偽造をできるようになったんですよ。色々勉強してやつとのことです。ホログラム写真がすり替え可能になりました。これさえあれば人生をやり直すことだっていくらでもできるようになりますね！」

はいはい……。まったく、こいつは無駄な知識ばかりつける。心を豊かにしようと思わんのかね。え？私こそ心を豊かにして言葉遣

いを直せつて？嫌だね。これは私が私であるというアイデンティティの問題だ。そう簡単に変えてたまつかよ。

「それでですね、あれを　　って、聴いてます？」

「あ？悪い聴いてなかった。あまりにつまんないのでな」

「絶対楽しいですつて。反社会的行動はスリリングな毎日を提供してくれるんですよ？最高ですよ」

そんなこと止めさせて私がエイジの生活をスリリングなものに変えてやるのかなあ……。ま、どうせ私は飽きてしまうが。とにかくこいつのアングラな話は止めさせよう。そうしよう。

「エイジ。その話はまた今度な」

「え、何ですかあ？」

「つまらんからな」

わかりましたよお……。と言ってエイジは自慢話を止めた。私は二本目のタバコに火をつけた。ふう……。うまい。エイジは立っている私の横に座り、自分のバックから最近発売された携帯ゲーム機『ER』を取り出し遊び始めていた。おいおい。私を一人にするつもりか？

「おいエイジ」

「ルカさんなんですか？」

さすがにゲーム止めるとはいえないな。どうしたものか……。

「……ゲーム楽しいか？」

エイジはうーんと言って、考え始めたようだ。そして数秒後にこう言った。

「四聖学園内でのケンカはゲームを使うし覚えといて損はないと思うから楽しいとかでやっているわけではないですね」

エイジの言ったゲームをケンカで使うと言うのは、私が学校の女王になった時に定めたルールだ。理由は簡単。私が誰かとケンカしたら十中八九、相手を人生再起不能状態に叩き込んでしまう。だからといって本気を出さないのはケンカとしてつまらないし、そういう理由で私が四聖学園の全校生徒にケンカはゲームの対戦でしなさ

い。と命令したのだ。広報委員の奴らに私の作ったこの学園の新たなルールを書かせたのだった。

「お前、得意なゲームジャンルはなんだ？」

「得意なジャンルですか？パズルゲームとかですわね」

ふうん……。なるほどね。エイジは確かにパズルゲームとか得意そうだな。私はまったくできない。せいぜい三連鎖ぐらいが関の山だ。「ルカさんは格闘ゲームですよな？」

「あ？そうだがなにか？」

「いえ、別になんでもないですよ」

ははつと笑うエイジ。こいつの笑顔はカワイイのう。頭を撫でてやりたくなる。というかもう手が勝手に動いてなでているのだが……。エイジは嫌な顔ひとつせず素直に頭を撫でられていた。嗚呼、本当にこいつが私の召使いでよかった。毎日独占できるから幸せだ。甘い甘いメープルシロップのような日々。

「ルカさん、身体の調子はどうです？もうすぐメンテナンスの時期なんで」

エイジはゲーム機から視線を私に移して言った。

「まあ、問題ないな」

メンテナンス。私の身体のメンテナンス。定期的に私の身体はメンテナンスを必要とする。神経接続部分の状態や、間接の動作チェックなどの点検だ。パーツの交換もすることがある。これを怠ると倒れたりする。外でそうなると、もうお手上げだ。エイジがいなければ私は動けず独りぼっちになる。一步間違えれば知らない病院に搬送されていたら。そうなっていたら一般人に裏社会でサイボーグが存在することがばれてしまう。その責任を取るため自爆も考えなければならなくなるのだ。嗚呼、恐ろしい。

でも何年たつても定期メンテナンスは嫌いだ。答えは簡単。私の身体をエイジ以外に見られるからだ。まあ永遠研究所の研究者はあくまで私を研究対象としてしか見てないからいいが、たまに研究所にお客さんが来ることがある。だいたいお客さんの目的は私であつ

て、サイボーグ化に成功した対象の視察だ。そんな奴らに私の身体が見られるなんてゾツとする。私が手足をバラバラにされたところを見て興奮しているんだろう。ああ考えただけでも気持ち悪い……。「メンテナンスは嫌いだ」

「何ですか？メンテナンスは大切ですよ？」

まったくもってエイジは私の気持ちをわかっていないな。まあ説明したこともないのでわかるはずもないのだが。でもそのくらい察しろ！

「どうしたんです？」

どうせ、こいつに言ってもわかってくれるわけない。世界鈍感ラッキングの百位以内に入るほどの奴だからな。

「……なんでもない」

「それならいんですけど」

再びゲーム機の画面に視線を戻すエイジ。なんかこいつに意地悪しなくなった。私はエイジの隣に座り込み、覗き込む振りをしてそのまま『ER』の電源を落とす。ぱっと画面が暗くなる。

「何するんですか！もう少しで完成したのに！」

「お前が私を不愉快にするからだよう」

「ええ！？僕がいつルカさんを不愉快にしたんですか！？」

「さっき」

エイジは明らかにしょげた。自分の感情に素直な奴だ。立ち上がり、私は三本目のタバコに火をつけて吸った。

「ふふふっ……、天からの罰じゃ！」

「天からじゃなくてルカさんの罰ですよ！」

「そんなの知るか」

「はあ……。なんかゲームする気、失せましたよ」

そう言っただけでエイジは立ち上がり、フェンスによりかかった。ぎしときしむ音。

「……そろそろ昼食の時間ですね」

「ああ、そつだな。トマトマーケットに買いに行くか？」

トマトマーケットは四聖学園の近くにあるコンビニだ。

「行きますー！」

元気でよろしい。

私とエイジは屋上から学校内に入って階段を下りた。どうやらまだ授業はやっているようだ。私たちが帰ってくる頃には終わっているだろう。

校門を出て左に曲がったところにトマトマーケットがある。看板には三つのトマトが描かれている。

いつも私が買うゼリーの飲み物を手に取りレジへ出す。私は会計を済ませ、トマトマーケットを出た。自動ドアの前でエイジが待っていた。

「屋上に戻るぞ」

「あ、はい！」

私とエイジが屋上の扉の前に立つ。しかし鍵が壊れていた。何かいやな予感がするな……。

屋上に人がいた。ちっ……、鍵をぶっ壊したのはあいつか。そいつが私に気づく。ぱあぁと顔を明るくして走ってくる。

「ルカお姉さまあ〜！」

「あ、ミチルだ」

エイジがそう言ったと同時に私は戦闘態勢を取る！ミチルの本気は機械の身体の私でもやばい。奴はナチュラルボンキラーなのだから。私は構える！！

「ルカアおねえさまあ〜！！」

私はミチルの抱きつきこうとする力の方向性を変えてミチルをひっくり返す！ようは合気道って奴だ。独学&力技だからだいたい相手を危険な目に遭わせるのだが、相手はミチルだ。

「イタタタ……、おねえさまあ酷いですう……。死んじゃいますよー」

「不死身のお前が死ぬわけがない。それにお姉さまと呼ぶのは止め

る。鳥肌が立つ」

えへへつと笑って立ち上がるミチル。エイジはぼうつと見ていただけだ。まったく、召使いなら守る振りでもしろよつての。

「それよりミチル。屋上の鍵よくも壊してくれたなあ？」

「あ……、えへ」

「えへ じゃねえ!!」

私は全力でミチルの左右のコメカミをぐるにしたらこぶしでぐりぐりしてやった。それでもミチルはえへ と言つてうれしそうにする。まったくこいつのDMっぷりには毎度驚かされる。

「私お姉さまに会いたくて会いたくて……、じつとしてられなかったんです……。かわいいでしょ？」

「かわいくねえ……!!」

全身の力を振り絞つてもミチルには通用しないようだ。いい加減疲れてきた。機械の身体と言えども疲れる。ミチルを解放する。私はいつミチルが暴挙に出ても大丈夫なように構えたままにした。

「今日は何のようだ？用がないなら来るわけがないだろ？」

そうなのだ。こいつは私に懐いているように見えるかもしれないが、実際は私に用がないと来ない人間失格疫病神なのだ。

「えへ そうなのですよ。今回もルカお姉さまの力を借りたいと思いましてえ」

「用件は早く言え。さもないと殺すぞ。三回殺すぞ」

「殺されたくないあゝいよっ！用件はいつものように殺し屋の仕事でくすう！」

はあ……。あ、ため息をついちまった。こいつは私が永遠研究所で身体のサイボーグ化がされているのを知っている。わたしとこいつは永遠研究所絡みの知り合いだからだ。こいつは怪力に急速再生能力を持っている。そしてナチュラルボーンキラーと言った意味はこいつが殺し屋だからなのである。

「どんな仕事だよ？」

「いつものように僕が突っ込むのお……。でねでね！悪い人の周り

にいるお友達を援護射撃で殺して欲しいのお!!」

かわいい口調で言っているがミチルは結構悪人に対して残酷な奴だ。

「場所はどこだ？」

「三木鎖運河町の倉庫街だよん」

「倉庫街か……。光学迷彩が必要になるな……」

光学迷彩とは場所を選ばない迷彩服でその性能は高く、確実に装備者の姿を消してくれる。死角は一切ない。

「標的はどんな罪を犯しているんだ？」

「今回の悪い人は麻薬を三上坂町に普及させようとしているの……。そいつの今日のスケジュールは四の三三三番倉庫でマッドハニーの取引だあつ」

マッドハニーというのは、生産コストが安く、劣悪な環境でも生産可能。取引価格も低いが強力な中毒性を持ち、一回でも使ったらもうアウト。そんな薄利多売な麻薬だ。

「今から準備しに家に帰る。取引現場の近くに三時までには着くようにしておく」

「オツケエ〜 じゃあ倉庫街でまた会いましょう〜」

そう言ってステップを踏んでミチルは去っていった。

「ルカさん……」

今まで黙っていたエイジが突然口を開いた。

「人を殺すのはダメです……」

「私に免罪符があるとは思っていない。私も人殺しという罪を背負った罪人だ。それはこれから何をしても変わりはない……」

「僕も行きます」

「……好きにしろ」

昼休みがもう少しで終わる。この学校を出たら私に与えられた非日常がやってくる。

三十分かけて永遠研究所に着く。部屋に入り、私は光学迷彩服を着て、もう一着をエイジに着させる。スコープ、サイレンサ付き折

りたたみ式ライフル。そして弾丸の入ったマガジンを手に取り専用バツクに入れて部屋を出る。準備は万全だ。

研究員を車の運転手にして三木鎖運河町の倉庫街に向かった。三十数分で倉庫街の入り口に着く。私とエイジは光学迷彩の電源を入れて車を降りた。

倉庫街は高い建物が一切ないところで、高くても四階どまりだ。十五分で四の三三三番倉庫の周辺に辿り着いた。後は狙撃場所を見つめるだけだ。幸い歩いて百メートル圏内に三階建てのビルがあった。屋上に向かい階段を上る。

屋上はやはり鍵がかかっており、ピッキングするか私が力技で開けるのかなさそうだった。

「エイジ、鍵開け頼めるか？」

「できますよ。そうですねえ……、五分ください。五分で開けてみせます」

「わかった。作業に移ってくれ」

五分後、エイジは見事、鍵の解錠に成功した。私たちは屋上に出て、四の三三三番倉庫を見る。大丈夫だ。ここからなら裏口は無理でも入り口の監視はできる。現在時刻二時五十分ジャスト。予定の十分前に行動するのがルカ様のルールだ。ここから監視し続けなければならぬ。

「ルカさん、ミチルはなんで罪を持った人を殺すんですか？」

エイジはミチルの過去を知らない。教えてやるか。

「……あいつの両親は家に入り込んできた強盗に殺されたんだよ。

ミチルも瀕死の重傷を負った」

「ミチルが悪を憎むのは両親を殺されたからなんですね……」

「そんなところだ」

私はスコープの先にミチルが現れるのを発見した。四の三三三番倉庫の前に立つ。そしてノックしたようだ。

黒服の男たちが出てくる。私は八人出るのを確認して、一人ひとり頭部を狙ってトリガーを引いていく。グッジョブ ミチルが私に

向かってそう言ったのが聞こえてきた。聴覚の感度を調整すればそのぐらいは聴くことができる。

ミチルが扉を開いて中に入っていった。それから数秒して銃声が聞こえ始め、私はそれに続く人のうめき声や断末魔を聴いた。そしてミチルの狂喜の笑い声も。あははははははははははははははははあああつ……………！！つて。

その後、ミチルが血塗れで出てきた。仕事はおしまいだ。ミチルはほおっておけば勝手に帰る。今のミチルに会う気は起きない。

「エイジ、帰るぞ」

「……………うん」

ライフルをバックにしまい、光学迷彩の電源を入れたまま狙撃場所を選んだビルを後にした。倉庫街入り口に着いて車に乗り込み、光学迷彩の電源を落とした。

「はあ……………、いつ見ても人が死ぬ瞬間の衝撃には慣れませんね……………」

慣れちゃダメだよ……………。私は心の中でエイジにそう呟いた。

「どうかしましたか？」

エイジが私に訊いてきた。私はなんでもない。と言って話を終わらせた。私は卑怯だな。話したくなければ終わらせる。エイジだって私を気遣って訊いてくれたはずなのに。

「……………僕はルカさんを許しますよ」

「え？」

エイジは黙り込んだ。車は永遠研究所に向かって走っていた。

研究所に着き、私とエイジは黙ったまま部屋に向かった。エイジに鍵を開けさせ、私は部屋に入った。気分が滅入ってる……………。打開しなくては……………。そうだ！シャンプーを浴びよう。浴びれば何か変わるかもしれない。

「エイジ、シャワー浴びてくるわ」

エイジは黙って頷き、エイジは自分の勉強机の椅子に座り込んだ。今日は十六番だ。私は十六番のシャンプーボトルを手に取りプッシュ。髪に塗りつけて泡を立てていく。やはり、シャワーは私の中

で安らぎの瞬間のひとつだ。今日は最悪な一日だった。ミチルの手伝いをする時はいつもこうだ。人を殺すのはいけないことだつてのはわかっているんだけど、どうもミチルの笑い声を思い出すとあいつに人を殺させちゃダメだなんて思うんだよな。ミチルはまるで昔の私みたいだ。中学時代の私。エイジと出会わなければたぶん、あのままだっただろう。暴れまくって人から嫌われる毎日が続いていただろう。今は昔よりは良くなった。でもあの頃私が殺した人たちは二度と生き返らない。

「はあ……」

ため息ついちゃったよ。嗚呼、私なんか消えちゃえばいいのに。最初っから存在しなければ良かったのに。あああああああ！もう嫌だ！こんなの間違ってる。何で私が人を殺さなければならなかったのだ！？私は女王様だ！一人の人を守るために生まれてきたんだ！殺そうなんて考えたのが間違いだったんだ！復讐は復讐の連鎖しか生まない。だからといって復讐するなどはミチルに言えない。私もミチルと同じだったから！

「あああああああああ！！」

口から心の、感情の悲鳴が飛び出しそうだ！苦しい！苦しいよ！誰か助けて！誰か助けてよ！！

その瞬間から記憶が曖昧になった。

気づいたらベットで横になっていた。時計を見ると午後九時半ちよつとだった。部屋の照明は消えている。エイジはどこ？

「……エイジ、いる？」

「いるよ。隣に座っている」

安堵感。私はどうしてベットに寝ているのだろうか。私は起き上がった。エイジは窓の外を見ながらベットに座っていた。

「ねえエイジ、私シャワーを浴びてどうしたの？覚えてないんだけど……」

「ルカさんが浴室でドタッて倒れる音が聞こえたんだ。ルカさんが倒れていて。それでさっきまで検査を受けていたんだ。安心して。」

過度のストレスが原因らしいから。ゆっくり休もう。そうすれば大丈夫……」

「そう……」

気を失ったのか。まったく、まるで女王様じゃないか。私らしくない。

「ルカさん、だいぶ参っているようだね。口調が元に戻っているよ」

「え……、そんなことないわ」

「ほら。戻ってる」

う……。つい気を抜いてしまった。まったくダメな女王様だ。いや、これが普通の女王様なのかもしれない。

「ルカさんはなんで僕を召使いにしたんですか？」

その言葉を聞いて私は思わず笑ってしまう。エイジが不思議そうな顔をする。

「さあ……、何でだろうね？」

こう言ってみたものの私が何故エイジを召使いにしたのかはわかっていない。私はこいつを守りたいのだ。純粹で、素直で、ちょっと悪いことが好きなこいつが。絶対的な破壊をもたらす悪から守りたいんだ。私の身体は機械でできている。脳死するか、核となる体内のパーツが壊れるまで私は生き続ける。私と違って、人というものは儂く壊れやすい生き物。私はそういうものを守りたい。特にその中でもエイジは一番守りたい。だから私はエイジと女王様と召使いという関係になったのだ。と言うより私はエイジを守るナイトみたいな感じか。もしかしたら恋愛感情も関係するかもしれない。私は再び笑った。エイジもなんとなく意味を解したのか微笑む。

甘い甘いメープルシロップのような日々。

嫌なことなんて消えて、安らぎが永遠に続くといいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3172p/>

女王さまと召使

2010年12月5日02時40分発行